2Yp-1

# 江戸末期越前地方の世帯構成

お茶の水女大家政　○古谷恵子　湯沢雍彦

**[目的]** 一般に江戸末期の世帯構成については、寿命が短かったから小家族だといわれる一方、三世代大家族が大半であったという主張もある。この相矛盾したイメージのどこまでが事実なのか、越前地方の歴史的資料を元に実証的に明らかにする。

**[方法]** 佐久高士『越前国宗門人別御改帳』全６巻から949戸分（1801～1867）を抽出し、戸ごとにカードにまとめて系図を作成し、「農・山・漁村別」「百姓・水呑別」に世帯構成を分析した。

**[結果]** ①人口構成は典型的な多産多死の富士山型人口ピラミッドであるが、60歳以上の高齢者が10.4％をも占める。　②世帯構成の地域差は非常に大きい。農村は核家族61.5％・拡大家族29.8％で核家族割合が高く、核家族のほとんどは「親＋子」からなる世帯、拡大家族では全てが「直系」三世代世帯であって、比較的世帯構成は画一的であった。一方山村は核家族39.9％・拡大家族58.3％、同様に漁村は41.8％・52.7％で、拡大家族割合が高く、特に山村では傍系親族を多く含んでおり、多様で複雑な世帯構成であった。
③平均世帯人員は農村4.0人・漁村5.1人・山村6.1人で、地域差がかなり大きい。拡大家族割合が高くなるにつれて平均世帯人員は多くなるが、同時にその世帯人員数の分散も大きくなる。　④百姓（自作農）では拡大家族割合が高く、水呑（小作農）では核家族割合が高いという傾向がみられたが、百姓・水呑間の差よりも地域差の方が大きい。また平均世帯人員は百姓5.5人・水呑4.4人であった。